

道元禅師は、幼少より非常に聡明であったと伝えられています。『法華経』をたちまちのうちに記憶し、当時の教養書である『春秋左氏伝』や『詩経』などをすぐに覚え、理解することができたといわれています。

七歳で母親を喪ってからは、『俱舍論』という仏教教理の入門書に強い興味を示し、十四歳で出家をしてからも、多くの仏教書を読破していきます。

道元禅師は優れた知性を持ち、さらに仏の道を求める純粹で強い志があったのです。

そんな道元禅師が、仏道を求めて渡った中国において、さまざまな出会いを経て、やがて真の師匠と慕う如浄禅師にまみえ、仏の道を究め続けます。そのプロセスは、知的理解にすぐれた道元禅師が、人生を深く見つめる眼を獲得していく歩みといってもいいかもしれません。

そこには、いくつかの重要な出会いがありました。もちろん、師匠である如浄禅師との出会いが最も重要だったでしょうが、その前に、言うなればその準備をととのえるような出会いがあったのです。

ここでは、天童山景德寺での、ある僧からの問いを紹介しましょう。

ある日、道元禅師がいにしえの偉大な僧侶がのこした逸話がまとめられた語録という書物を読んでいたとき、通りかかったある僧侶がその語録をのぞき込んで道元禅師に問いました。

「語録を見ておられるようだが、何のために見ているのですか」

「日本に帰って、人々を教化するためです」

道元禅師はこう答えましたが、その僧侶は、たたみかけるように問います。

「何のために人々を教化するのですか」

「人々を救うためです」

と道元禅師が答えると、その僧は間髪を入れずに問い詰めます。

「つまるところ、そのようなことがいったい何のためになるのですか」

道元禅師は、返事をする事ができませんでした。その僧は、何も言わずに立ち去りました。

語録やお経を読み、頭でのみ理解しようとするだけでは真実の仏道修行にはなら

『禅のこころ-曹洞宗-』

ないということに、道元禅師が気づかされることになった場面だといえます。

また、「何のために」という理由・目的を何度も問われ、答えに窮^{きゆう}したことで、理由や目的が本質では無いということに気がついたともいえるでしょう。

この出来事は、後^{こうねん}年道元禅師が説くようになった「~のために」という目的や理由から離れてただ坐る「只管打坐^{しかんたざ}」の坐禅につながっていく、とても重要な出会いだったと思われます。

この出会いは、知的理解にすぐれていた道元禅師が、心の向きを大きく変えていくものだったといえるかもしれません。そして、より深い世界や人生を見る眼^{まなこ}を得て、如浄禅師のもとで、仏の道を究めてゆくのです。

— 終 —